

絵本画家

いわさき

ちひろを

作った人

松本猛

まつもと たけし／美術・絵本評論家、ちひろ美術館常任顧問。一九五一年、松本善明、いわさきちひろの長男として東京に生まれる。一九七七年にちひろ美術館・東京、九七年に安曇野ちひろ美術館を設立。同館館長、長野県信濃美術館・東山魁夷館館長、絵本学会会長を歴任。

の友人となる人でした。

意気投合する二人

稲庭桂子は岩手県出身で、ちひろより二歳年上でした。朝日新聞の記者だった父親は、宮沢賢治を世に出すうえで重要な役割を果たした弟の宮沢清六とも知り合いだったそうです。その影響が、童心社の昔の社屋には版で刷られた「雨二モマケズ」の詩が掛けられていたということです。

稲庭は青山女学院を卒業して、戦前は劇作家を目指し、紙芝居の脚本を書いていました。戦中、戦後に両親や妹を亡くし、二度と戦争のない世の中になりたいと戦後すぐ疎開先の岩手から上京し、日本の民主化運動に身を投じます。

ちひろは戦争中に宮沢賢治の文学に出会い、絶大な影響を受けていました。ちひろと稲庭は賢治という接点もあり、同じ日に東京空襲で被災し、戦後、平和を願って民主化運動に参加したという共通点もあり意気投合します。

童心社とちひろ

紙芝居「お母さんの話」(一九六五年の再版時に「おかあさんのはなし」と改題)は稲庭がアンデルセンの童話を紙芝居用に脚色したものでした。この作品が

な若い人向けの絵本企画を考えだします。

『絵のない絵本』はヨーロッパスケッチの成果がふんだんに生かされた、鉛筆線の美しい絵が見開きごとに入る絵本として出版され、ヒット作品となります。

「若い人の絵本」

以後、ちひろは毎年「若い人の絵本」を描くようになり、このシリーズはちひろの新しい画境を切り拓いた代表作となります。

二作目は稲庭の強い希望で、広島で被爆した子どもたちの作文や詩を集めた『わたしがちいさかったときに』。三作目はロシア革命の前に自由主義を掲げて蜂起し捕らえられた青年将校の妻たちの物語『愛かぎりなく』。これはちひろや稲庭や渡辺の若き日の思いが重なった本でした。ちひろの提案から生まれたのが宮沢賢治の『花の童話集』と樋口一葉の『たけくらべ』。ちひろと渡辺が青春時代に夢中になった万葉集から二人が好きかな歌を選んだのが『万葉のうた』でした。

ちひろの仕事振り返ってみると、稲庭桂子との出会いがなければ、また渡辺泰子という名編集者の存在がなければ、現在知られている絵本画家いわさきちひろはいなかったかもしれません。

稲庭桂子との出会い

いわさきちひろが本格的に子どもの本の仕事に携わるようになったのは、戦争が終わってまもない、一九四七年ころのことです。戦前・戦中と続いた価値観が崩れた混乱期の中で、ちひろはなぜ戦争が起きたのかを考え、自立して新しい生き方を模索します。

絵の勉強をやり直そうと、疎開先の信州松本から単身上京、小さな新聞社に記者の職を得て何とか生活し始めます。絵の勉強をしながら、必死でカッターや挿し絵の仕事もしていたころ一人の女性が現れます。ちひろはその時のことを後にこう書いています。

「大へんものごしのやさしい女の方が、つとめ先にあらわれて、私にアンデルセンの「おかあさんのはなし」の紙芝居の絵をかいてくれといわれました。三千円も画料を払うというのです。あのころは三千円もあれば女ひとりなら一カ月の生活は十分できたのです」

この、仕事の依頼をきっかけに、ちひろは新聞記者を辞め、絵筆一本で生きる決意を固めます。物腰のやさしい依頼者は日本民主主義文化連盟(文連)の稲庭桂子という女性でした。この稲庭こそ、後に童心社を立ち上げ、ちひろの重要な仕事のパートナーであるとともに、終生

童心社の前身となる「教育紙芝居研究会」から一九五〇年に出版され、文部大臣賞を受賞します。

稲庭は一九五七年に夫の村松、片腕となる編集者の渡辺泰子などわずか四人で童心社を設立し、編集長となり、ちひろとともに紙芝居や絵本を次々と出版します。

童心社が子どもの本の出版社としての地歩を固めたのは、一九六〇年に出版される『絵のない絵本』の大成功があったからです。この絵本の文は浜田広介、絵がちひろでした。その後も、童心社はちひろの絵を使った本を何冊もヒットさせます。

もうひとりの編集者

ちひろと稲庭は親しい友人だったからこそ、ケンカもよくしたようです。編集者と画家という関係もあり、仕事をする上では急いで関係修復もしなければならぬ場合があり、その役割を担ったのが編集者の渡辺泰子でした。

渡辺はちひろより二歳年下でしたが、絵心もあり、万葉集などの好みも重なり、社会に対する考え方も一致していて、ちひろがもっとも信頼する編集者となりました。私がもの心つくようになってから、ちひろのアトリエに一番長くいた編集者

は渡辺泰子だったと思います。

締め切りが迫っている時などは、朝、会社に行かずにちひろのアトリエに出勤し、そこで仕事をしながら、ちひろの相手をし、夜中までいることもよくありました。『あいうえおのほん』のときもそうでしたが、「若い人の絵本」シリーズはちひろと稲庭と渡辺の合作といってもいいものでした。

「絵のない絵本」

一九六三年、いわさきちひろと稲庭桂子はソビエト(現・ロシア)で開催された世界婦人会議に日本代表団のメンバーとして参加します。この旅のなかで、ちひろはアンデルセンの『絵のない絵本』を描きたいと稲庭に語ります。

帰国後、稲庭は渡辺とともに企画を考えるのですが、幼児図書専門の童心社にとって、人生の苦悩や社会の矛盾を描いた短編集『絵のない絵本』の出版は極めて難しいものでした。

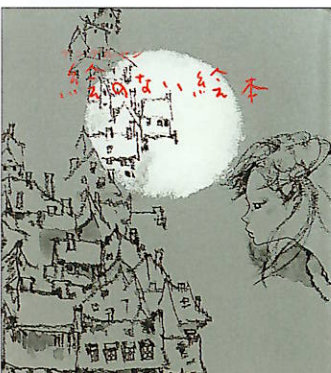
三年後の六六年、ちひろは稲庭と渡辺にデンマークまでアンデルセンの取材に行くかと告げてヨーロッパ旅行に出かけます。童心社の看板画家でもあるちひろの要望をかなえたいと、渡辺は思索を重ねついに女子学生が手に取りたくなるよう



『おかあさんのはなし』再版1965年(初版1950年) 稲庭桂子/脚本



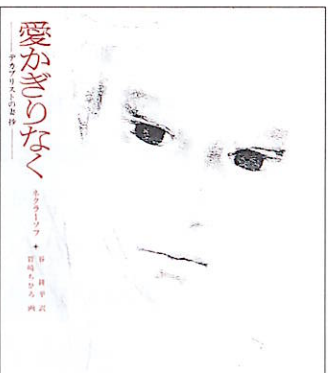
『あいうえおのほん』改版1975年 浜田広介/文(初版1960年)



『絵のない絵本』1966年 アンデルセン/作 山室静/訳



『わたしがちいさかったときに』1967年 長田新/編



『愛かぎりなく』1968年 ネクラーフ/原作 谷耕平/訳



『花の童話集』1969年 宮沢賢治/作



『たけくらべ』1971年 樋口一葉/作



『万葉のうた』1970年 大原富枝/文